

今回は当財団の評議員で、Jリーグの5代目
チェアマンを務める村井満氏と、川野理事長の
対談をお送りします。「子どもたちに伝えていき
たいこと」や「私たちにできること」について、
2人に語ってもらいました。

50年以上前からつながっていた縁

川野 村井さんには2012年から評議員としてお力添え
いただいておりますが、それ以前から、私が会長を務める
ヤオコーとの繋がりがあったのですよね。

村井 実は父親が事務長をしていた小川の赤十字病
院に、売店としてヤオコーが入っていたので、父親はト
モ名誉会長に大変懇意にいただいていたんです。

川野 50年くらい前の話ですかね。

村井 あと、私が勤めていたリクルートという会社で
は、「ヤオコー物語」はすごい有名だったんですよ。

川野 第1期生の新卒採用の時の話ですね（笑）。

村井 スーパーが黎明期に大卒を採用する取り組み
は、当時はすごいインパクトだったようです。あと、理事
長は私の出身校である県立浦和高校の同窓会長でも
いらっしゃいましたね。

川野 そうしたご縁から親しくしていただいているわけ
ですが、評議員になっていただけたのは、どのようなと
ころにご賛同いただけたからですか？

村井 実は私は2歳の子どもの心臓突然死で亡くした
経験があるのです。子どもを失った時の苦しみや悲し
みというのがずっと私の中にあったものですから、理事
長が子どもたちや小児医療のために尽力されていると
お聞きした時には、力になりたいと思いました。医療の
分野に関しては全くの門外漢ですが、まさに創業の志、
理事長の思いに惹かれたということですね。

川野 どうもありがとうございます。

村井 付け加えると、生業としてずっと人の採用や教
育に関わってきましたが、ヤオコーの人材育成には学
ぶところが多いと思っていました。お客様のために技術

特別 対談

子どもたちの笑顔のために 私たちができること



村井 満

Mitsuru Murai

公益社団法人日本プロサッカーリーグ / チェアマン
当財団評議員



川野 幸夫

Yukio Kawano

株式会社ヤオコー / 代表取締役会長
当財団理事長

を磨き、時には競い合い、思いを持って採用・育成する
ということが私の考えていることとも近く、評議員として
接点を持たせていただくことで、私自身の成長にもつな
がるのではと思いました。

「Jリーグを使って」 地域に子どもたちの笑顔を増やす

川野 村井さんはJリーグの5代目チェアマンとして、
子どもたちに対してどのような思いを持って仕事をされ
ているのですか？

村井 Jリーグでは1993年の開幕以来、チーム名とし
て企業の名前ではなく「地域」を名乗り、地域への貢献
を大切にしてきました。地域ごとに気候も風土も文化も
歴史も異なりますし、直面する課題も様々です。ですか
ら、それぞれの地域の課題と特性に合わせて、各クラブ
が社会と連携して取り組んでいこうと考えているんです。

川野 それが、Jリーグが進める「シャレン！（社会連携
活動）」ですね。

村井 はい。社会課題や、教育・ダイバーシティ・まち
づくり・健康・世代間交流などのテーマについて、地域
の人や企業、自治体、学校などと連携して取り組むわけ
ですが、その時に「Jリーグを使って」地域に笑顔を増
やすために何ができるかを考えてもらおうと思っている
んです。

川野 面白い発想ですね。実際の取り組みにはどのよ
うなものがあるんですか？

村井 例えば、ガイナレ鳥取では、選手と子どもたち
が本気で鬼ごっこをする「復活！公園遊び」を開催して
います。遊び場が減り、外で思いっきり体を動かして遊
ぶ機会が少なくなっているからこそ、プロサッカー選手
が全力で遊んでくれる非日常の体験が、子どもたちにい
い刺激を与えているんです。他にも、福島ユナイテッド
FCでは子どもたちと田植えなどの農作業をしています。
農作業は体幹を鍛えるのによく、楽しみながら選手と一
緒に体づくりをするのです。

川野 発達障害の子どもたちがスポーツ観戦する取り
組みをニュースで拝見しましたが、あれもですか？



村井 川崎フロンターレの取り組みですね。発達障害の子どもに一番良くないのがサッカー場のような音のうるさい場所だと言われますが、彼らにサッカー観戦してもらうにはどうしたらいいのかを考えました。大分県の子どもを川崎市に呼ぶために、旅行会社のノウハウを活用して飛行機に乘せたり、地域ボランティアが総力を結集して心を落ち着かせるためのセンサリアルームを用意したりして、何のトラブルもなく楽しんでもらいました。Jリーグだけではできないことも、「Jリーグを使って」地域の方々と連携すれば実現できるんです。

子どもたちに伝えていきたいこと

川野 そうした取り組みの根底にあるのは、未来をつくる子どもたちを大切にしたいという思いでしょうか。

村井 そうなのですが、大切にするがゆえに危険なものを遠ざけたり、過剰に援助するのは我々の感覚としては違うと思っています。そもそもサッカーとは人間が手を使わないでやるので、失敗が多いスポーツなんです。それに、生身でぶつかるので怪我も多いんです。そう考えると、うまくいかなかったり、失敗した時にどうやって立ち上がるか、それをサッカーを通じて子どもたちに教えられるといいのではないかと私は思っているんです。まさに今回の新型コロナウイルスも同じで、うまくいかないうちにどうやって前を向くか、それを子どもたちに伝えていきたいんですよ。

川野 本当ですね。素晴らしい取り組みですし、それを

進められるのが村井さんの偉さだと感じました。

村井 ちなみに、スポーツの語源ってご存じですか？

川野 ……何でしょうか？

村井 deportareというラテン語で、「港を離れる」という意味から、「毎日の仕事や勉強から少し離れて余暇を楽しむもの」が語源と言われているのです。だから乗馬や射撃、先日の東京オリンピックでもスケートボードやサーフィンが注目されましたが、ああいうのが本来のスポーツなんです。

川野 そうだったんですね。

村井 だから、しごきとか体罰とかそういうものは関係がないんです。それに、フェアプレイでないと楽しめないもので、ルールを守ることが大事です。スポーツが本来持っているそういうメッセージをしっかりと伝えることも、スポーツ界の役割だと考えています。ちなみに、理事長はスポーツはされますか？

川野 小・中学では剣道をやっていました。自分で言うのもなんですが、強かったんですよ。6年生の時には県大会で13人抜きで優勝したこともあります。



村井 それはすごいですね！

川野 あとは妻とやるゴルフくらいです。これについては息子を亡くしてからですね。仕事ばかりだった自分の家庭におけるあり方を反省し、父親として、夫としての役割を果たしていきたいと思った時に、妻と一緒に趣味を持とうと思って始めたんです。ゴルフがお互いの仲を少しは縮めてくれたのかなと思っています。

村井 実は私も同じです。仕事ばかりの毎日で、子どもが亡くなった時に、一緒に遊んだ記憶がないくらいだったんです。記憶に残っているのは、周りのみんなを引きつける計算のない喜怒哀楽だけ。それが本当に魅力的に残っていたんです。片や私は営業で作り笑い。醜い顔です。そう思った時に、楽しいことや嬉しいこと、悔しいことはできるだけそのまま出そうと決めたんです。子どものあの領域まではいけませんが、そう思いながら家族と過ごす時間が増えたことは、私にとっては掛け替えのない財産です。

財団運営をサステナブルな取り組みの1つのモデルに

村井 理事長が今後描いていきたい未来について、よいですか？

川野 財団として小児医学の発展に少しでも貢献したいですね。今の国の財政状況では研究費はどんどん減っていき、思い切った研究はできなくなっていくでしょう。私たちの活動費は政府の予算とは比べものに

ならないくらい微々たるものですが、研究費が少なくなるほど、私たちの活動が果たせる役割は大きくなります。そのためにも、まずはヤオコーの業績を伸ばし、配当金を増やすことで研究助成や奨学金の支給を増やしていきたいです。同時に、活動の幅も広げていきたいので、いろんな案を考えていこうと思います。

村井 会社の発展が財団の発展となり、社会貢献にもつながっていくわけですね。

川野 そうなっていけばいいなと思っています。

村井 今の日本を見回しても、得た利益を財団というかたちで社会に還元しながら、社会を良くする取り組みにつながられているところは多くないと思います。まさに循環型のサステナブルな取り組みの1つのモデルとして、川野小児医学奨学財団には今後も発展していったほしいなと思います。

川野 今日はお忙しい中、ありがとうございました。

Profile

村井 満

1959年8月2日、埼玉県生まれ。早稲田大学卒業後、日本リクルートセンター（現リクルートホールディングス）入社。同社執行役員、リクルートエイブリック（後のリクルートエージェンツ）社長などを歴任。2008年よりJリーグ理事を務め、2014年1月より第5代チェアマンを務める。